九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第5回研究大会課題研究シンポジウム「これからの生活体験学習の内容と方法を考える」

https://doi.org/10.15017/9068

出版情報：生活体験学習研究. 5, pp.97-118, 2005-01-28. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

第５回研究大会
課題研究シンポジウム
「これからの生活体験学習の内容と方法を考える」

日　　時：2004年１月31日㈯　14：00～17：10

場　　所：福岡県社会教育総合センター

コーディネーター：九野坂　明　彦（庄内町生活体験学校）

コメンテーター：正　平　辰　男（東和大学）

発壇者：野　中　米　里（本渡市宮地岳小学校）

山　下　厚　生（北九州市生涯学習総合センター）

小　原　達　朗（長崎大学）

日本生活体験学習学会誌　第５号　97―118（2005）

課題研究シンポジウム「これからの生活体験学習の内容と方法を考える」

日時：2004年１月31日（土曜日）

午後２時00分～５時10分

コーディネーター：九野坂　明　彦（庄内町生活体験学校）
コメンテーター：正　平　辰　男（東　和　大　学）
発壇者：野　中　米　里（本渡市宮地岳小学校）
山　下　厚　生（北九州市生涯学習総合センター）
小　原　達　朗（長　崎　大　学）

上野

「これからの生活体験学習の内容と方法を考える」を始めさせていただきます。シンポジウムに先立ちまして、実行委員を代表しまして、このシンポジウムの趣旨についてご説明させていただきたいと思います。

今回の研究大会は第５回を迎え、このシンポジウムも５回を迎えることになりました。これまで、生活体験学習の広がりに背中を押されるような形で、生活体験の実践やそれのもつ意味などの模索を私どもは続けてきたわけですが、昨年の第４回研究大会の折には、生活体験と言うけれども、私たちは、それぞれの立場で割合と勝手にこの言葉を使っているのではないだろうか。そもそも、生活体験というのは一体、どういうことを意味し、どういう概念として使っていったらよいのかということを、立ち止まって考えてみようと言う主旨で、「生活体験の原理を問う」をテーマにシンポを開催いたしました。

そして、先程、南里先生からご報告がありましたように、これまでの蓄積を基にしながら、私どもは次の一歩を踏み出して生きたいと考えております。その一つが、生活体験学習の事典の編集作業です。この事典の編集作業を進めていく中で、原理・原則を確定することも大切なことではありますが、そればかりではなく、生活体験学習の内容や方法についても、もっと議論を深め、そして更なる発展を目指していきたいと考えているところです。

そこで、今回のテーマを「これからの生活体験学習の内容と方法を考える」に決めさせていただきました。生活体験学習の実践と言うものが広がるにつれて、生活体験学習のやや技術主義的な傾向や安易な方法というものも一方で増加してきているのではないかと思います。

また、これまで生活体験の実践のなかには、長年蓄積されてきたがゆえに、ややマンネリ化しているというようなことも否めないのではないかと思っております。そこで今年は、今までの長年の実践の蓄積と、その間の理論的な研究の方法というものをあわせてながら、さらに新しい生活体験学習の内容と方法と言うものを切り開いていきたいと思っております。そこで今回は、熊本県からは小学校の野中校長先生をお招きしました。そして、北九州で生活体験に取り組んでこられました山下さん、この間、学会での科研の調査研究を中心に担ってこられた長崎大学の小原先生をお招きして、この課題を深めて行きたいと思っております。コーディネートとコメンテーターを、庄内町生活体験学校の九野坂会員と正平副会長にお願いしています。どうぞよろしくお願いします。

九野坂

では、これよりシンポジウムを開催いたします。最初にご登壇を頂いた方々のご紹介をいたします。まず、一番右手にお座りの方が、野中米里さんです。熊本県本渡市の小学校の校長先生をしておられ、平成15年10月の第５回実践交流会で通学合宿のご発表をしていただきました。今日は学校の教職員の立場や学校の現場から、お話いただきたいと思っております。

次は、山下厚生さんです。山下さんは北九州市の生涯学習総合センターにお勤めで、長く社会教育主事を務められ、社会教育の現場から、北九州と言う大都市の中での生涯学習、通学合宿、公民館活動に取り組んでこられたお立場から今日は発言を頂くことになっております。

続きまして、長崎大学の小原達朗さんです。去年の８月から11月にかけまして、庄内町の生活体験学校で子ども達と一緒に生活をしていただきました。今日は、研究者の立場からご発言を頂きます。

それと、今日はコメンテーターという役職を作っております。庄内町生活体験学校の実践者である東和大学の正平さんです。

そして最後に私、九野坂と申します。

シンポジウムの進め方ですが、「これからの生活体験学習の内容と方法を考える」と言うテーマの、「これからの」というところに力を入れたいと考えております。

一番初めに野中米里さんからご発言を頂きたいと思います。

野中

皆さんこんにちは。熊本県の南のはずれ、本渡市宮地岳小学校の野中と申します。まとまった話が多分出来ないと思うんで、さっきから逃げて帰りたいような気持ちです。本渡は天草にありますが、ご存知ですかね。私も実はそこから一時間ばかりのところに実家はあります。そこから全然知らないで赴任をして、今天草本渡市に5年おります。

この学校には2年で、初めて小学校に参りまして2年目です。本校で生活体験学習をやろうじゃないかという声は、地域の公民館から起こってきたわけです。なかなか小さな町で、町村合併にのりおくれたような町で、町自体は元気がないんです。子ども達は現在43名。全校生徒がです。そんな中で、非常に狭い、完結された世界と言うのは、子どもの経験を広げていかないんですね。田舎ですから、田植えもすれば鶏のえさもやるというような、こういうことは経験はしてるんです。でも、地域が元気がない。子どもを育てる積極性がちょっと感じられない。高齢化率が38%で、本渡市の中の小さな地区なんですけれども、宮地岳地区と言うのは256戸しかありません。祖父母がいる3世代家族は多いんですが、実際には核家族と同じですね。なぜかというと、祖父母が元気がない。もう、祖父母が家庭教育の中で期待されていない。そういったところが、子ども達の経験を狭めている。広げてやることが学校としての課題かな、と思っております。

それともう一つは、学校の中で体験的な活動は様々行われはするんですが、その中で集団宿泊とか、そういったものが多分賞味期限を過ぎたような活動になってるんじゃないかと思うんですね。本校で長く行われてきたPTA主催のキャンプがありますが、キャンプとは名ばかりで、本当に大人の自己満足で終わってるようなキャンプなんですね。そういったものからまず手をつけたいなと思っているところに、熊大の古賀先生と知り合いになった公民館の主事さんの生活体験学習をやりたいと言う思いと、私の思いがたまたま合致したと言うわけです。私もその時点では色々方法を考えていましたが、私の視野の中にここで言うところの生活体験学習の形があったわけではない。どちらかと言うと、本来の姿に戻ったキャンプ、野外活動等をやりたい、そういうふうな気持ちで、それをどう学校で表現していけばいいのか。そういったところに話が出てきて、とんとん拍子に話が進んだわけです。地域に根ざした学校経営をというのが基本姿勢にありますから、公民館とは非常に仲がいいわけです。それでなんというか、本当に、実践もあったわけではありません、公民館も私どもも。ただ、案外初めてやる学校と言うのは大概こんなもんじゃないのかな、と考えているところです。

子ども達自体は、素直で従順です。その素直だという場合には、たいがい大人にとって従順であるという意味でですね。それは単に裏を返せば自己主張が出来ないというところがあります。阿吽の呼吸で暮らしておりますので、自分を表現できない。当然、課題を自分たちで見つけて解決するようなエネルギーも低い。関係作りというのは、子ども同士でも大人同士でもそうですが、関係作りの力が脆弱なんですね。もまれていないところから来るいろんな問題が中学校に上がって出てくる。そういったことを、どうにか解決するための方法というところで、何とかご指導を仰ぎながらやってみようとしたわけです。ただ、実際にやろうかというところに来ますと、もう初めてで、とっかかりも悪くて、期日の設定も出来なくて、結果的に夏休みの後半になってしまいました。3泊4日ですね。おまけに、「わんぱーく」と言いまして、子どもに関係する地域の様々な団体11団体で作った実行委員会があるのですが、その実行委員会が主体に動いたものですから、学校だけが動くと学校だけがリスクを負うことになりますが、みんなで渡れば怖くないと言うところがあって、リスクが分散されました。リスクの分散となれば、学校は関わりあうということになると言えばなるんですが、一方で、責任の所在があいまいになったために、詰めが甘かったという点がでてきました。形だけでもやろうと言うことでやったはいいんですが、プログラムしすぎてしまって、何のことはない、集団宿泊の地域版ということになってしまいました。

それで、終わった段階で、一番勉強したのは、熊大の学生さん達が一番勉強したかなと思います。子ども達はですね、子ども達も親も、それなり勉強する部分はございましたが、今、終わって非常に感じていることは、今日、私が言いたいなあというところ、思っていたところを、第一分科会で、お話があったので、とても嬉しかった。私が生活体験学習を、通学合宿をやろうとしたときに、ちょっと引っかかっていたことがあります。実は、全校生徒を呼び集めてます。43名。希望の子ども達だけでやりますと、本当に小さな地域でやりますので、共同体験がある子とない子、夏休みの終わりにやっていったときに、共同体験から外れた子どもについてその後の学校でのフォローがやりにくくなります。共同体験がとにかく、地域と学校と家庭も一緒になって子育てというところを今の段階で非常に目標にしているところがありまして。この経験、たとえば、4日間の経験の中で、獲得するものももちろんありますし、たとえば獲得するものも目に見えないものがあります。見えて獲得するものと、見えなくて獲得しかかっているものがある。この、獲得しかかっているものを、本当に身につけさせるためには、この後が大事だと私は思うんです。色んな中学生を見てきて。その部分を学校が担いたい、学校がというよりも、学校も担いたいと思う。だから、そのためにはぜひ、全部、何とか無理してでも参加させたいなと。

実は、学校の中で一番大きく変わったのは何かと言いますと、子ども達の人間関係をお互いの価値観から見た見方、固定化した人間関係というものが壊れ始めました。そういう現象だと思うんですが、それまで見られなかったような、いじめですとかトラブルが、わっと出てきました。この出かたが、あの合宿の中で価値観の崩壊が彼らの中にあったな、というような出かたなんです。それまで学校がやはり、少なくともみんなと関わって情報を頂きながらやったから、その後のフォローが非常にやりやすかった。解決がしやすかったんですね。それで私どもとしては非常に教育効果があったかなと思っています。細かい説明までは出来ませんが、そういったところがありました。

今、強く思っていますのは、学校の中もそうなのですが、問題場面をあえて作ってやるということをしなくなってしまって、例えば、泳ぎを教えるためにも色々泳ぎ方をあの手この手で教えてしまうのですね。水の中で個人個人やる、そして子どもに学ばせると言う機会を学校はしないのです。だから、泳ぎを教えるために、水の中で個人個人やる、その場面作りを誰がやるか、それを誰かに押し付けるのではなくて、学校と地域とあげてやりたいな、協力してやりたいなと。16年度は通学合宿に取り入れたいと思っております。思っておりますが、そこも本校なりにやっていけたらと意欲がわいているところです。

九野坂

それでは続いて山下さんにお願いします。

山下

北九州市の山下と申します。資料集に1頁のレジュメを事前にお送りさせていただきましたが、すみません、今日お配りをしました数ページの資料をご覧頂きたいと思います。若干レジュメに載せたものと中身の修正等がございますので。資料集のほうのレジュメはすみませんがボツにしていただけたらと思います。

通学合宿と言うのも全国色々ございますし、また今日お集まりの皆さんのところでもそれぞれに違った形の通学合宿を行っておられるんじゃないかと思います。私どものところでは、やっと今年で3年を経過したところです。まあ、15年やってるところもあれば、まだ始めたばかりのよちよち歩きの通学合宿、それが北九州市の現状かと思っております。実は、北九州の通学合宿というのは、公民館や、公民館とほぼ同じくらいの機能を持つ市民福祉センターといった既存の施設を使って実施をするという方法なのです。

北九州市には、全部で123の校区にそういった公民館や市民福祉センターがあって、その中で、3年間でやっと25箇所の実施をしたという状況です。まさに始めたばかりの段階で、むしろ皆様方に参考になるお話を出来る状況ではありません。悩みもあれば課題も多いという、試行錯誤の中で、少しではありますけれども、これが生活体験合宿をやった成果かなと思えるよう芽がちょっとづつ出てきたかなというのが現在の到達点だろうと思っております。

一回目の発言は、そういった北九州市の生活体験学習の実態についてということでお話をさせていただき

ます。資料に書いていますように、平成13年度から15年度の間に３年間で延べ25地区、25館で実施をいたしました。16年度については、実は国のモデル事業の指定が終わりましたので、市の方では地域に任せるということになっておったのですが、この事業は継続する価値があるのではないかということになったようで、16年度も市が単独で予算をつけまして、15年度と同じ程度のことを実施しようということになったようです。ただ、基本的には将来的には市がお金を出してする事業ではなくて、それぞれ地域で自主的にやっていただきますよという方針をもっているのが北九州市の現状です。対象としておりますのは、そこに書きましたように､小学生の上学年です｡それから事業の主体となっておりますのは地域の公民館や市民福祉センターですが、実施主体はいづれの地域も実行委員会を作りまして、したがって市の予算で委託すると言う形式を取っております。場所は、先程述べましたように、地域の公民館や市民福祉センターそのものを使うという形式です。実施期間は、６泊７日です。

それで３年間やってみました。この３年の事業の中から、いくつかのことが見えてきたと思っております。一つは限られた条件の中で、施設の中で、やっぱりやりにくいという面と、そうはいっても公民館や社会福祉センターでやるメリットもあるのだという点。宿泊場所が公民館や市民福祉センターは、もともと宿泊する施設として作っておりませんので、台風が来るというときに館長が泊り込むときは寝袋を持ってこられてたのです。宿泊は出来ない施設なので、当然布団もありませんし、洗濯をするような設備もありません。トイレはほんのわずかしかありませんので、館によっては簡易トイレをレンタルしているところもあります。公民館や福祉センターですから、一週間に１回の休館日を除いては色んな事業があってるわけです。その事業に非常に支障が出るというのが実際として指摘をされている問題点としてあります。通常の業務を止めなければならない、あるいは制限しなければならないということがあります。それから、主に都心部では、自然体験等に不向きなところもあります。あるいは、子どもは小学校単位だと申しましても、非常に画一的でやりにくいと言う指摘もありました。メリットと思えるのとしては、公民館や福祉センターですから、日頃から地域づくりに取り組んでいますし、関係するいろんな団体との連携もあります。そういった意味では地域とのつながりをそのまま利用することが出来るという点。また、このつながりをもっと密にしていくきっかけにしていけるということがあります。それから、そういった施設で活動しているいろんなボランティア団体がありますが、そういった団体と提携・協力してやっていけるという点。そういうメリットがあります。生活体験プログラムの展開がまとまりがいいというところから言うと、やりやすいのではないかと思います。資料の中に実施後のアンケート等から抜き出しておりますが、何が今の子ども達に不足しているのかということがこの結果からみえるかと思います。子供たちにとって一番つらかったことは、予想されたことですが、早起きとか、朝の体操とか、掃除や洗濯がつらかったとか、テレビやゲームが出来ないとか、家族に会えないといったこともありますが、人と協力して物事をやるということがつらいという風に出ています。それから2番目に、通学合宿で初めて体験したこと。買い物です。これは普段の買い物はやるのでしょうが、生活に必要な夕ご飯のおかずを買い物に行くとか、といったことが初めてだというのが大部分でした。それから、洗濯をしたのが初めてだ、早寝・早起きが初めてだとか、そういった結果が出ています。自分で布団を敷く、あるいは上げるといったことも挙げられていたり、他人と一緒に風呂に入ったこともありました。今の子ども達は、そういう機会はないのでしょう。学校でよくボランティア体験とかいいますが、ボランティア体験を今までしたことがなかった子どももいます。そういった試行錯誤の中から、いくつかの地域でいろんな特色ある取り組みが出てきたように思います。例えば、地域の特色を生かして、その地域じゃないと出来ないような取り組みですね。戸畑の天籟寺というところ、これは戸畑祇園の「手まり子」といって、その時にみんなに配るちょっとした飾り物なんですが、それを子ども達が文化財の保護団体の皆さんに教わりながら作ってみた。門司では、地元の山に登って山にある素材を使って色々なクラフト作りをやったりですとか。次年度は違った素材を見つけ出してみようじゃないかという取り組みがなされたという報告がありました。それから、「四学通学合宿」という造語を書きました

が、北小倉市民福祉センターでは、ボランティアで中学生・高校生・大学生が、非常に大きな戦力となって一緒に通学合宿をやったという取り組みが見られております。やって見えてきたことはですね、生活体験がないのは小学生だけじゃないんだと。中学生はもとより、高校生も大学生も、ホントに自分達が教えたり指導したり協力したりという立場どころか、本人達も体験をしていくというところから始めなきゃ出来ないんですね。しかし、そういう中で、やっぱり先輩として子ども達の面倒を見ていこうというふうに、中・高校生・大学生等が活躍いたしました。朝、地域のお世話をしてくださった方たちが小学校に出て行く子どもと中学校に出て行くボランティアと、高校に行くボランティアと、大学に通うボランティアと、それぞれの4つの学校に行く者を見送るという「四学通学合宿」になってしまったわけです。これは通学合宿が終わった後も、アンビシャス広場関係が続いておるわけで、非常に大きな成果ではないかと思います。

また、地域ぐるみの支援体制というところでは、本当に地域を挙げてまちづくりの活動そのものではないかという位置づけをして沢山の方々が参加してやったところもありますし、反対に、あいまいな関わり方をしてもらったら却って子ども達に悪い。と関わる者を絞り込んだケースもあります。これは後で時間があれば報告したいと思います。24の通学合宿とは違った形でやっておる館が1館ございます。ただ、その中からも紹介しておかなければいけない成果も上がってきていると私どもは見ております。

最後に成果と課題としては、初期的な成果と課題となりますが、意義や目的がだんだん浸透してきたということがいえるのではないかと思います。もちろん、子どもも一週間公民館・市民福祉センターに泊まって何をするんだというところから、だんだんと自分達が友だちと宿泊して色んなことをやるのだ、自分でご飯を炊いて洗濯をしてやることがどんなことかといったことが分かってきたようですし、本当に最初の段階では学校に協力していただこうと思ったら、どうしてそんなことをという声もありましたが、そういったこともだんだんなくなってきました。それから、これは大きな声で言えませんので、聞かないことにしていただきたいのですが、最初の年は市の財政当局等から「なんでそんなことしないといけないの？」ということが予算査定の段階でありました。ちゃんと、少年自然の家も青年の家も北九州市は立派な施設をもっているじゃないか、なんでそんな変なことをしないといけないのか、ということがあったようです。4年目の予算の段階で、成果を上げているということが認められたみたいで、そこら辺はやはり一歩変わってきたかなと思っております。それから地域の機関の連携だとかそういったことも地域の特色を生かした関係が生まれたとか、子どもや保護者に変化の兆しがあった、あるいは若いボランティアに変化があったことが成果じゃないかとか。課題は沢山残っております。やはり、将来地域の自主事業に移行していくということについては、今から色々考えておかないといけないこともありますし、プログラムが非常に内容が豊かで、しかしやってみるとこれは無理だということが分かってくる。やはり、プログラムをもっとシンプル化していかなければいけないということも共通して出てきています。それから、名実共に、子どもを客体から主体へ、このことも後で時間があればお話したいと思いますが、どうしても子どもがお客さんで､全て整えてさあ､いらっしゃいという通学合宿から、だんだんと企画の段階から子どもに参加してもらおうというように変わりつつあるということが言えると思います。その他、ボランティアや地域団体などの協力体制の問題、あるいは、高齢者の役割の問題、あるいは地域の教育力を高める事業として、体験をすることによって子どもが変わってくる。しかしそれが地域が変わり大人が変わるというものに結びつけて行くといったことが課題として追求されている地域もあります。いろいろと問題と課題を抱えておりますが、現状としてまず、ご報告をさせていただきました。

九野坂

どうもありがとうございました。次に小原さん、よろしくお願いします。

小原

4年生から6年生の男女一名ずつの6名、それを1人の観察者が行動と意識の面から、もう1人が動作の面から生活の調査を行いました。行動と意識は九大の

永田さん、動作の方は長崎大の勢頭さんが子ども達と朝から晩までずっと寝起きを共にして、空気のような存在でずっと記録しておりました。３番目の文化的な身体というところでは、私が初日と７日目に行って、自分で一生懸命書いていったつもりなんですけれども、その観察を基に報告します。

まず１番目の行動と意識に関する事例と言うところでは、生活スキルの獲得と変容と言うところから取り上げて課題を見ていきたいと思います。生活スキルを二つに分けております。一つは上達しやすい、動作的スキルと言ってよいかと思いますが、割と簡単に、意識することだけで動作が変わりやすい。「こういうときはこうしたらいいよ」とか、「ここを握るよ」といったような、こういう風にすぐ変わるものですね。それから、「箒はこう持つ」とか、「薪割りはこうだ」とか、「米の研ぎ方」とかいったことです。事例としましては、自分でけがをしたために、すぐに自主的に注意して料理をした子どももいれば、ナスの葉の非常に細かいとげが痒かったり痛かったり、あるいはクモがいたりして嫌がった子どもがいたらしいんですが、それも注意してやればどうということはないんだということが分かったりしました。あるいは、動物や植物の立場になって考えたり、どういう風に触れたらいいとか、苗木をどういう風にして植えたらいいのかなどです。

それからもう一つ上達しにくいスキルがあります。集団的な生活スキルです。十分な意識の変容があって、やっと行動の変容に結びつくようなもの。繰り返して継続しなければならないものです。行動と意識変容のスパイラルというものがありますが、行動が変わって意識が変わって、また行動が変わって、それで意識が変わって、という具合です。先程の報告では、つらかったことは、生活体験で初めて体験した早起きだとか、洗濯だとか、テレビが見られない生活習慣とか、人と協力するというのはなかなか難しいことですね。こういう部分も入るのかなと思います。ここにも、早起き、段取りのつけ方、気遣い、コミュニケーションなどを挙げております。例えば、早起きは早起きして電気釜のスイッチを押さないとご飯も食べられないし、木を割って薪をくべないとお風呂にも入れない。あるいは、味噌汁の味付けも、辛い、薄い、上手くない、量が多い・少ないなど、いろんなことの按配を満たしていくことが大切だということです。そう簡単には上手くいかないというようなものです。それも、汚いものへの拒否感の減少と言うのは、台所の中もちゃんと始末するとか、あるいは年下の子が出来ることで、年上の子が意識や行動が変化するとか、そうやって変わっていくことがあります。

それから３行目の作業での協力体験、どんぐりを植えたりする機会が何回かあったと思いますが、試行錯誤しながら役割を自分たちで決めてやっていくようなことがありました。この中の課題につきましては、学習すべき生活スキルをたぶん分類とかされていなくて、なんとなく枠組みだけあってされていると思うんですが、もしこういうことがあれば、ちゃんと分類したり整理したりして、あるいは参加者の参加回数によって変えるとか、あるいは意図的にプログラムを組んでみるとか、そういうようなこと、結果的にここではたぶん上達しにくいけれど、身につける非常に貴重な場だと感じております。２番目の動作に関する事例としましては、ほぼ全員が参加した活動は「調理」と「どんぐりの植え替え」、それからあとで私が説明する「生活技能」があるんですけれども、経験の有無がものを言う調理に関しては家庭での日頃からの手伝い、あるいは関心があるのかどうかで差があったと思います。それから参加回数の少ない２・３年生に比べて５・６年生は上手であったと言うことですね。調理は、通学合宿で最も作業の回数が多かったものです。そういったことで、どんどん上達していった。それから、包丁や火などの危険なものを使用して時間の制限や成功させる責任もあるようなものですね。生活体験学校では「口は出すけど手は出さない」のだと思っていたにもかかわらず、そういったことには結構手を出されていた。そういった点では基本的には余裕がなかったと思いました。それでも、上級生から下級生へ、出来る子から未熟な子へ、「教えてもらったように教える」といった動きがよく見られました。まあ、自然な流れが出来ていたと思います。中腰とか、中膝だとか、膝の使い方が非常に出来てないと言う。重いものを腰を落としてぐっと挙げればいいものを、多分腰を曲げて引っ張りあげるようなものが多くてそういうところは指導もされていないし、改善もしません。

それから、生活技能については10項目調べておりま

す。これは2年生から6年生まで全部行いました。結果的には、鉛筆の持ち方・使い方、はさみの持ち方・使い方、雑巾の絞り方、蝶結び、箒の使い方、おんぶの仕方の6項目は全国調査に比べて非常によく、上手でした。2～3年生もです。それから、箸も持ち方・使い方、後ろ結び、箱包は、全国と同様なレベルでした。同時に調査しました鉛筆の持ち方とか指導されていますか、とか、自分はそういう技能を意識してやっていますかということを調査したものがあるんですけれども、それと動作のできばえの得点を見た方が、非常に二つ似たようなプロットした分布がありますけれども、下のほうが全国の子ども達で、経験度という得点が20点以上あると、確実に動作得点が30点、だいたいできると言うことになるんですが、生活体験学校の子ども達は、20点以上は誰もいません。指導とかされてないし、うまくやろうとか思ってもいない。だけど、動作得点は全員30点以上と言うことで、この辺が非常に面白い特徴です。おそらく、レジュメにも書いていますように、先程教えられたように教えると言うこともあったし、自然な形で、生活技能を学ぶ、まねることが出来てるのじゃないかという点が特徴かなと思います。課題としましては、そういう自然な学習の場でありますので、意図的な、自然な学習の場にもすることが出来るのではないかなというのも感じております。

それから3番目ですが、斎藤孝さんが「腰肚文化論」というのを言っております。まあ、肚が据わってる、肚が据わってる、人間にならなきゃいけないんだ、と。その中で私たちは、動作がある以上やはり膝、下半身の使い方と言うのは非常に大事だと言うことで、文化的身体、腰・腹・膝文化と言うものを取り出して、腰腹を精神性、腰と膝の決まった身体性、それを使って他者と付き合ったりするのを関係性として分類しているわけです。資料の2頁にあるのですが、6年U男くんから4年のH子さんまで、それぞれが精神性・動作性・関係性で、1日目と7日目に分類したものです。まあ、これで見ますと、精神性では、自信、達成感、存在感が見られるようになり、わずか数日間の体験で違いが見られました。これは、初めての参加で見られる変容ではなくて、むしろ、継続して参加することによって可能になるように思われます。動作性ではさほどの変容がなかったので、個々の能力に依存している。ただ、意識の持ち方ではすぐに変容するものも見られた。関係性では、従順な態度が特徴的で、指示によく従っていた。これはいわゆる支持待ち行動ではなくて、集団を構成するために必要な行動が理解されていたと言うように受け止められます。最終日には6年生がリーダーとして連携をとる態度や下級生への言葉賭けが多くなるようなことが見られました。また、包丁で指を切ったこの仕事を肩代わりするようなことが見られたり、お互いの作業の段取りを指摘しあうような交流も見られて、コミュニケーションの必要性を、身をもって感じていたようでした。課題としましては、単に生活体験学校で体験するだけでも心身のたくましさを見に付けていくことが伺われました。4年生で腰・肚の据わった態度の子ども、腰膝の使い方が巧みな子どもが見られる一方、6年生でもそうでもない子がいた。このように差の見られたことから、高望みかもしれませんけれども、文化的身体をはぐくむという視点もあってもいいのではないかという点が挙げられます。

まとめとしまして、実際の子ども達の生活体験学校での通学合宿の観察を通して、3つの柱でそれぞれの課題となるような点を取り上げたということで、今でも素晴らしい実践なのですが、若干意図的に訓練する。今このような場が出来上がっているので、有効に働くのですが、意図的なこと、あるいはボランティアさんとも意図的にこうだってことを図る必要があっていいのじゃないかと感じています。以上です。

九野坂

どうもありがとうございます。子どもの生活体験として何が足りないのか、何が多すぎるのか。子どもの生活体験を困難にしているものは何なのか。やっていいものと、やってよくないものが体験活動にあるのか無いのか。地域・学校・家庭が、このことにどういう役割が担えるのか。どこから始めたらよいのか、何から始めたらよいのか、体験の量と質、大人の関わりについて、コメンテーターの正平さんからお願いします。

正平

はい、3人の先生方のご発表を、特に子どもとの関わりで気付いたことを申し上げますと、野中先生のご発表の中では、一つには子どもに負荷をかけるという

こと、適切な負荷というものが非常に難しいわけですが、負荷はゆるすぎても駄目だし、きつすぎても駄目。やっぱり、適切な負荷と言うものは何かと言うことを考えていく必要があるという風に先生のお話から感じました。それとあの、学校全体で子どもを参加させると言うときに、体験の領域によって、何年生からだったらこの体験活動に参加できるだろうと言ったこととか、いわゆる年齢で無理なプログラムは何なのか、適時性というようなことを先生のお話から感じられました。庄内の場合で言えば、7年目から小学校3年生を入れるようにしましたし、それから今、小学校2年生を入れているのは、2年前の秋から入れています。そういうふうにずっと学年を下げていきますと、どの学年でどういう風なことをさせるとどんな効果があるのかないのか、というのが経験的に分かってくると思います。

もう一つはそれと同様のことですけれども、学校全体でやるときに、どこでも最初始めるというときに適切な規模はどれくらいかということを悩むわけなんです。それを先生のお話聞いておりますと、適切な負荷あるいは適時性、それから子どもの集団の適切な規模と言うことは何なのかを感じました。

それから、山下さんのご報告では、教えることは学ぶことと言うのが、やはり高校生や大学生の参加によって明らかになったのではないかと思います。自分が出来なくても、ある程度の年齢になったら子どもに多少伝えていこうと言う行動をとります。教えることによって自分が学んでいくということが、典型的な形で大学生や高校生の参加の場合に出てくるんだろうと思います。それから、シンプルなプログラムと言うお話がありましたけれども、これはどこでも経験を重ねて行きますと、特に通学合宿の場合には、ごちゃごちゃあれもこれもプログラムに詰め込んだ結果、子どもを追いたくって何したか分からないような忙しい通学合宿と言うのが、まま取り組みの初期の段階で出てきますけれども、それは、基本的には今、自分の地域の子ども達が何が出来て何が出来てないか、子ども理解が進んでくれば、そんなにごちゃごちゃプログラムに入れ込むと言うことはなくなってくるんじゃないかと思います。

小原先生のご報告では、実践者の我々が上達しやすいスキルとしにくいスキルがあるということをやはり頭に入れておかないといけないし、行動と意志のスパイラル、行動と意志が連続した形で次々に起こっていて、態度の変容や認識の変容が起こってくるのを頭に入れておく必要があると思いました。教えてもらったように教えると言うのはもう、生活体験学校でも経験的に沢山見てきた姿です。特に私にとって気持ち悪いのは、子どもを叱るときに今の若い指導員などが私が怒っていたように子どもを怒っているのを聞くとゾッとすることがありますけれども。そういう場面と言うのは決して珍しくない。それから庄内の子どもの高い動作得点と言うのが、先生の調査で初めて明らかにしていただいて、また一つ新しいことが分かったなと言うように思いました。

九野坂

登壇者の相互の意見交換に移っていきます。このシンポジウムの中で、皆さんと一緒に新しい糸口、新しい鍵を見つけていけたらと思っております。では登壇者の方に後は自由にご発言を頂きます。どなたからでも結構です。時間の許す限りお願いします。

小原

野中先生よろしいですか？生活体験学習をやった結果、人間関係が崩れてきたとか、沢山のトラブルが出てきたようなんですけれど、それに対しては、学校で色々対応を取られたこととか伺いましたが。具体的にどういう対応だったかを知りたいのですが。

野中

詳しいところはお話できるか分かりませんが、うちの子どもたちというのは、保育園からずっと中学校まで一緒なのですね。だから、本当に力関係も固定化されますし、相手の見方もまた自分自身の殻も破れない。本当に固定化された人間関係の中で育っています。それを、ある意味、非常に上手く使っていきますから、学校の中でも喧嘩もないんですね。喧嘩する経験もないんですよ。そういうのを、学校としてはどういう風に仕掛けて行ったらいいのかな、と思っていて、学校の中では、なかなか上手く行かない。ところが、生活体験合宿ではそれをいとも簡単の破ることが出来た。

上手くいったわけです。

具体的には、例えば学校の中では非常に手のかかる子どもがいます。教室でもなかなか手がかかる。色々問題があるわけですが、その子どもに関しても子ども達は、非常に手を暖かく差し伸べていまして。それでうまくいくんですね。ところが、やはりそこに子どもなりに無理をしている自分、いい子でありたい、大人の立場から見ていい子でありたい、周りからいい子でありたい、そういう思いが、ある意味「こんなの嫌だ、いい加減にしてくれ」と言うことを出せないでいたんですね。そういうのを出すことから始まる新たな人間関係というのが一人一人あるんですけれども。

それが合宿をすることで四六時中一緒にいるわけです。学校の中では、もう黙っていれば済むところが、もう、一晩中なわけですよ。そこのところでやっと本音が出てくる。だれだれ死ねとかですね、大問題になりそうですが。それまで事件らしい事件が、何もない学校でしたから、職員の方があわてました。でも、そうじゃない。これは合宿の成果なんだよ、いいんだよと言うところから始まって。何が良かったかと言うと、子どもにとっても良かったけれども、そういったことが私たち職員に認識された、私たちが気付かない子どもの世界が実はあったということに改めて気付かされたのです。

九野坂

どうぞ、どなたか。

山下

三人だけではなくて、フロアーの皆さんも含めて二点だけ問題提起の意味で申し上げたいと思います。保護者やボランティアの関わりの問題です。北九州の25の地区のうち、何といいますか両極化している問題があるんです。生活体験学習をやるという目的、子どもにとってはこれこれこんなことをとか、それを合わせて学校と地域の連携を深めるだとか、子どもを地域で育てるだとか、まちづくりのきっかけにしようとかですね。したがって出来るだけ多くの地域の方を参画してもらうとか、実行委員会も出来るだけ沢山の方で作ろうと、そういった努力の現れているのがほとんどですね。

ところが一つの館では、これとはちがった考え方で通学合宿の成果を期待しようという運営がされています。出来るだけ絞っていこうと言うんですね。それから保護者の位置づけが違うのです。保護者は企画運営委員会に参加するということが前提で、参加できない方はお断りしますと。そして、お別れ会の主催は保護者がやる。保護者がお別れ会の企画運営をやってるわけなんですね。お世話になったボランティアの方々とか、公民館の方だとか、子ども達にですね。色んな準備をして保護者が主催するお別れ会。こういったやり方です。ボランティアも、出たり入ったりするようなボランティアはお断りしたいと。全期間を通じて一貫して関わっていただく。そうでなかったら子どもにいい影響を与えない。こういう考え方でやっている館が一館あるんですね。これはそれなりに硬い絆が出来たとか、参加した保護者の方が地域のリーダーに育ったとか、色々、公民館のその後の事業の核になったとかですね、そういった成果が上がっている。しかしながら、少しでも多くの人に参加してもらう、あるいは子どもの問題に目を向けてもらうということからするといかがなものかという意見も一方ではあるということが一つ。

それと、今年、昨年と４館が同時に実施をしている期間に、台風が来たんですね。それで、そのうちの一館は強行しました。ところが、３館は中止しました。最後のプログラムは中止するということになりました。中止の理由は、これは行政の方からの命令なんですね。責任ある立場からすると、中止しなさいということで、３館はやりたかったけど中止するしかないと。センターの社会教育主事の私ですね、やりなさい、いい体験の機会だ、台風様様ではないかと言いましたけれども。こういう対応はみなさんだったらどうされるか。２点です。

九野坂

今の点をキーワードに、後半の討議をさせていただければありがたいと思っております。それぞれありませんでしょうか。

小原

はい。山下さんに。結局、四学通学合宿になった、

と。中学生、高校生。古賀先生のご報告も聞かせていただいてるんですが。大学生が一緒に関わって、苦労もあったし、勉強にもなったということですね。保護者、親、そういった形の大人を変える事業なんだ、と言うところが、また通学合宿の一つの課題になるのですね。

九野坂

ありがとうございます。正平先生、ご質問ありませんか。

正平

質問と言うよりも、もう大人をかえる通学合宿の仕掛けをほとんどやった。これは、やっぱり、みんなで関心をもって考えていかなければなりませんね。ただ、これは、色々仕掛けを私も考えてきましたし、提案もしてきたけど、なかなか大人は変わらんし育たない。それで、やっぱり通学合宿に対する期待と言うのは、あんまり世間に迷惑をかけるようなボランティアは、サポーターをつけて害毒を薄めてやる、ことですね。そういう男は家におっても害毒を流すんですね。子どもと通学合宿の期間、預かってやりゃあ、奥さんも幸せになられるわけですから、お互い、考えて地域で支えあって。やっぱり奥さんに多大に迷惑をかけている男がごろごろおるじゃないですか。どこからかお前のことやろうと言われそうですけれども。それもやっぱり抱え込んで。基本的に大人は容易に変わるもんじゃない、ということをしっかり腹に据えていく必要があるんじゃないかと思います。

九野坂

私の方から、お伺いしたいんですが。野中先生のところで、隠れていたものが見え始めるという、見えないものがそこの存在することが分かったことですね。地域と学校と、それをどのように担っていくのか、また育てていくのかというところですが、もう少しいいでしょうか。

野中

その前に、学校と言うものには期待されてないのかな。というのが、確かに学校は学校なんですけれど、同じ子ども達なんですよね。その子ども達は家庭にもちろん帰りますけれども、時間としては寝ている時間を除けば学校にいる方が長い。学校を利用するには、より、通学合宿を上手く行かせるにはどういったところを変えていけばいいのかな、というところが、先程も見えていなかったものになります。私は地域にいるので、割といろいろなことが見えたりするんですが。職員に見えていなかったもの、学校以外の子どもたちの姿ですね。では学校の中で、様々な問題やいじめが発覚したのは、おそらく気付かなかっただけで、子どもは逆にいっぱい持っていた。学校の中ではそれは表面に出ない。学校と言う枠組みの中に持ち込まれなかったのは何故かといいますと、「学校の顔」を作っていた。

そういったものが、本当に、これは保護者に対しても言えるのですが。私が全員参加と言うところにこだわったのは、先生方にも親を説得していただいたんですが。親御さんがこんなにも子離れできないのかという点です。それとうちの地域だけかもしれないですが、参加費でもめるんですね。地域性というのでしょうか。教育効果というものの PR が足りなかったかなとも思うのですが。今年の実施の段階では自分達は金を出すだけと学校が言ってると思っていたのかもしれない。保護者が持っている、子どもへの関わり方の課題、そんなものも見えてきたなあと思いました。

九野坂

先程小原先生からお話がありました、上達しにくいスキルというところですね。キーワードがもしあればご紹介をお願いしたいと思います。

小原

なかなか難しい問題ですね。上達しにくいスキルを沢山盛り込むと大変なことになると思うんですね。今子ども達にやらせたいことを割りと重点的に、意識化させてやってみる。先程、自然に身につくものだとも言いましたけれども、この辺に関しては、やっぱりやらせてみて、意識化させてやらせてみる。これを何時間とか、短時間でも、意識化させて繰り返しやっていくこと、これが必要なんですね。これをやはり、ここだけで終わらないで、家庭で、ここのところがポイン

トだと訴えて、継続していくかどうかということなんじゃないかなと思っております。

九野坂

コメンテーターから提案ということで頂き、その後、16時過ぎから、会場の皆さんから始めにご質問を頂いて、各登壇者の方にお願いしたいと思っております。次に会場からの意見、意見交換を頂きまして、最後に、17時くらいにまとめに入りたいと思っております。どうぞ、ご協力をお願いします。

＜休憩＞

九野坂

コメンテーターの方から、少しお話いただき、その後にフロアーの皆さんからご発言いただきたいと思います。コメンテーターの正平さんお願いいたします。

正平

今日のご発表を含めて、私が生活体験をずっと考え続けているのは、結局、ペーパーにも書いておきましたように、子どもが体験を獲得する場っていうのは、学校であったり、家庭であったり、社会教育の場であったり、地域であったりするわけなのですが、当然のことですが均等ではないわけなんですね。学校が全ての子どもに均等に同じことを教えて行くというわけですから、これは全ての子どもにって言うと、それは、やれることもあればやれないこともある。均等にというのは限界がある。その対極にあるのは家庭で、親達が子どもに教える家庭での体験。それが各個別の体験であって、Ａさんの家とＢさんの家とＣさんの家とが同じようになるということはないわけですから。全くみんな違う個別の体験をする。

一方、社会教育と言うのは、全ての人間が参加しないと言うことを前提にしているわけですから、対象児童の５％であったり10％であったり。では、５％や10％の子を対象にやるわけですから、そのプログラムというのは、家庭の体験よりは一般性があるけれども、学校の一斉体験学習のように広く浅くと言うと語弊がありますますが、均等には行かない。しかし、一般性、いわゆる広く網羅的な体験になっているかと言うと、社会教育ではそんな風になってない。しかし、それが、家庭や学校や社会で行われる子どもに対する体験学習のプログラムが、たとえば、学校の立場から家庭のプログラムや社会教育のプログラムと言うのが見えてるのか見えてないのか。社会教育サイドから言えば、家庭の今日の教育の状況と、学校での今日の状況というのが見えているのかいないのか。見えていて、具体的にそこをつないでいくと言いますか、そういうものの抑え方が出来てなければ、いくら家庭や学校や地域社会の連携を言ったところで全然繋がらない。私は、スクールキャンプを指導したことのない、若い女性の教員に頼まれて、「スクールキャンプの指導をどうしたらいいんですか」と聞かれたから、「あなたやったことあるの？」「ありません」「じゃ、できんやろうね」と言ったら、「そんなこと言わないでどうしたらいいか教えてくれ」と言うのです。そこで、去年のスクールキャンプのプログラムを30分間隔くらいで全部線を引いて、そしてその中で家庭でできる部分と言うのをマーカーでつけて、そして、１ヶ月も２ヶ月の前から、今週はお茶碗を洗いましょう・お皿を洗いましょう、今週はお味噌汁を作りましょう、今週はカレーライスを作りましょう、みたいに呼びかけをしながら、ずっとやってごらん。そしたら、子どもは分解されたプログラムを家庭で実行してその集大成を持ってスクールキャンプに参加してくる。そういう体制を作んなさいと言って、やってもらったんですけれども。「終わってどうでした？」と聞くと、「私のクラスが一番仕事が早くてきれいで立派でした」と。「あんたがやったことがないようなことを、学校の教員だからって無理に指導せんでいいとって。したことのないことはできんっちゃけん。でも、それを組み立てて家庭や社会教育のプログラムを活用して自分の指導の中に生かしていく。」通学合宿でもそうです。通学合宿で体験したことを学校で生かしきれている子もいるわけです。すなわち、生かしきれているさまを、学校の教員が見て取れているか。見て取れなければ、いくら学校と社会教育の連携を言ってみたところで、それは単なる言葉遊びに過ぎない。そういう意味で、それぞれの子どもの多面的な子どもの実情を学校や社会教育の中で育くまれたあらゆる能力が子どもの中にあるわけですから、それを生かして、褒めて、そして常に他の領域の体験学習プログラムの

成果・効果を意図的に見ていこう、評価していこう、出来れば活用していこう。そういうスタンスが我々に求められていると私は思います。

九野坂

ではご質問とご意見の時間に移らせていただきます。始めに、質問を20分ほど取らせていただきます。前置きをはずし「ずばり」キーワードから聞いていただきたいと思います。

森山

はい。それでは、二人の方に質問するので１分半ではなくて、３分ほど時間をください。野中先生に。43人と言えば、へき地教育と思いますが、へき地教育のよさは、親しい関係を固定化させることだと考えていくわけなんですけれども、やっぱり、通学合宿などをしないといけない状況があるということでしょうか。２点目は、学校教育の中でどうすればいいのかというご質問がありましたので、いま、総合学習みたいなことが出てきているし、その辺はどのように生かしていけばいいのか。つまり、キーワードはへき地教育の可能性としての通学合宿。そして、総合学習で学校を変えられるものがないかどうか。二つ目は小原先生へ。生活体験学習の内容と方法に、身体性というものを入れたのは、大変素晴らしいことだと思います。ただ、関係性をと言われますが、膝が関係性と言っていいのかどうか。たとえば、自然との関わりで、鍬とか鋤とか、農具を使わなくなって、高齢者の腰が伸びましたよね。７、80歳になっても腰が曲がってる人がいなくなった、そういう風に、関係性とか言うことの中でいいのか。社会力との関りです。キーワードは社会力。よろしくお願いします。

九野坂

はい、ありがとうございました。同時に手が挙がりました関係で、もう１人先にお聞きしたいと思いますが。桑原さん、どうぞ。

桑原

五木村から来た桑原と言います。野中先生にお尋ねです。学校で行う集団宿泊とまた違って、あるいは公民館との連携で行われたこの通学合宿ですね。きっかけはどうであれ、この通学合宿をやったことで、大規模・中規模・小規模それぞれ課題はあると思うんですが、小規模校で起こるその、固定化した人間関係は、自分自身を映す鏡が少ないということからも、人間関係とかあるいは生活共同体験があるかないかということが見えてきたと思うんですね。私も一回してるんですが。そういうことをプログラムを、親と教師で分析をして、そして、次の課題が見えてくると思うんですけれども。再度プログラムを構築していけば、このきっかけが、今日のテーマであるこれからの生活学習の方法と内容になっていくと思うんですけれども、教師もそれについて、通学合宿についての課題を分析とかに、学校として関わらせたのかどうか。そして、今後そのような方法を取り入れようとされてあるのか。

九野坂

はい。まず始めに野中先生のほうからお答えいただいてよろしいでしょうか。

野中

上手く答えられるか…。うちは準へき地です。小規模校のよさを分かっているつもりですし、それを生かす教育も取り組んでいるのですが。そこの中で通学合宿をする意味があるかというのは、私自身このところ、自分に投げかけてきたところです。今でも、選択肢の一つでしかありません。なぜかと言うと、私自身が自分の視点を十分にしていない。ですから、一番最初に述べましたように、私の頭の中で、自分が野外活動してきた関係で、その魅力と言うのからまだ離れられない。ただ、通学合宿の日常性とか能動体験とかに非常に魅力を感じています。それともう一つは、本地域が非常に恵まれているなと感じるのは、学校の道向かいに公民館があって、それが非常に使いやすい。それと、過疎化している地域ですので、昔からの農家が沢山残っているんですね。そういったところを提供していただくことは出来ないのかなということも考えられますので、来年度16年度は進めていこうと思っております。

それからもう一つ、総合的な学習でも可能と思うんですね。ただ、今うちの学校が行っている総合的な学

習のねらいとは違う。まあ、検討して行きたいなとおもいます。今すぐどうこうとは思わないというようには思っております。させたいことは山のようにあるものですから、それはそれ、これはこれ、ということですすめています。

それから、桑原先生のご質問ですが、例えば、学校内研修の中で、その分析をやったかと言われたら、そういったことはやってないです。トラブルが起きて、そのトラブルの検討会の中で、先ほど申し上げました子どもの状況についても話し合いをだいぶ時間を取ってやりまして。それぞれの細かい分析はやってないんです、実は。教育集団、私、公民館主事と関係者がいますけれど、中で実際に動いていたのは公民館主事どちらかと言うと、学校は今度の運営自体にはあまり関与してないんですね。大人シャットアウト、保護者シャットアウト、教員シャットアウトで、子どもをとにかく大人から引き離して、子どもを水の中に投げ込む状態を作ったところで。だから、分析したらどうこうという状況にはまだないのです。教師の中に戻しても、まだそこのところがもう、切り離しているので、机上の空論になる。より、職員が意識を持っているのは合宿後に起きたことを、それを合宿の成果として捉えたこと。そんなんでよろしいでしょうか。

九野坂

この件は山下さんが先程、皆さんに問いかけをされた両極化している問題、保護者、ボランティアが多く関わっているところ、または精選してやっているところという問題とかなり関わっているテーマではないでしょうか。では、質問が出ておりますので、小原さんにその質問に答えることからお願いしたいと思います。

小原

第１分科会で使った私の資料をみて下さい。紫色の資料の分科会の一番初めが私の資料なんですが。それが残っていれば、森山先生に渡して下さい。腰・肚・膝文化というものを出しておりまして、いわゆる、腰・肚文化と言うものをいわゆる、精神面、これは斎藤孝もそのように捉えておりますけれども。これだけでは動作と言うもの、動く文化と言うものは足りないだろうと言うことで、腰・肚・膝文化です。腰・膝というところを主に身体利用、動作性というところで捉えております。腰・肚・膝全体で捉えた動作と言うものを表現文化と言うことで、関係性として捉えております。真ん中に遊びや労働や祭り、そういうものをやることによって、動作性が身につくし、あるいは精神力が身につくし、関係性、コミュニケーションと言うものが身につくということです。社会性との関係ですけれども、精神性、そちらの部分はその表れとしての言葉の形、型ですね。その使い方、それから腰・膝、全身を使った動きの型、合理的な型、それから表現そのものは型である、と。そういうものを通じて、型は社会力だろうという風に思っております。しゃべり方、電話の応答一つをとっても、もしもしこちらは誰それで、云々、こういうことで用件がありますから、しゃべり方の型、それから、先生の研究室の部屋のドアをどんどんと叩いて、誰それですけどよろしいでしょうかみたいな型。その辺は精神性に関わるもので、型を持っておれば電話に出ることも誰かを訪ねていくことも怖くはありません。型を持たない子ども達、あるいは大人は、バリアを張って、行かんようにしとこうとか、聞きたいことはあるんだけどやっぱり嫌だなあ、と。それは、型を持たないでいきなりやってきて、先生あれそれと言うと、君はどこの誰なんだ、と先生から怒られますけれども。型を持っておれば自由が広がります。それで社会性が広がる。いい形を持っておれば、自分に自信がつきます。なぜかというと、しゃきっとしておれば、人から、君いいぞとかって。ダラッとしておけばそれはあんまりいいという風に評価されない。やっぱり、シャキッとした型を持っていることが、子どもの意味ではどうか分かりませんけれども、大人とは非常にいい関わりとなると言う意味で。先生のおっしゃる社会力と非常に関わりのあることなのではと思っております。

九野坂

ありがとうございました。どなたかご質問はありませんでしょうか。

村上

北九州市から来ました村上といいます。山下先生に。資料の２ページの、試行錯誤の中からと言うことで、

特色ある試みもということで3点挙げられてますが、先程の説明で、①②は説明がありましたので、③④について、細く説明をしてください。お願いします。

九野坂

ありがとうございました。では、山下さんお願いします。

山下

北九州から同士討ちが入りましたので。簡単に説明します。地域ぐるみの支援体制、これは先程ご説明しました支援するものを限定をするということの対極でもあるわけで、これが大勢なんですが。おおまかなところはこういうところを目指しているわけなんですが。いろいろな団体が関わっておりまして、子ども会、PTA、そのようなところをはじめ、学校との連携を含め、地域を挙げて通学合宿をすることによって、そして、子どもの問題に地域全体が目を向けて地域で子どもを育てていけるようなまちづくりを進めていこうと、そんなような視点に立ったことをやっております。この資料の3ページに挙げております中の霧丘小学校校区、陣山公民館などがその典型じゃないかと思います。それから、3つのこだわりで成果ということで、それが対極にある、保護者が参加できる、企画運営に参加できると言うことでないと、参加を許さないとですね、ここはですね、そういうことをやり始めたきっかけになったのが平成13年度の事前研修をする中で、その時子どもが24・5人申し込みをしておったわけなんですけれども、その中に何といいますか、日頃学校でも何かと問題のある子という風に見ておった子どもがトラブルを起こした。トラブルを起こしたことによって、全部周りが引いてしまったわけです。もう、あの子が来るんだったら参加しないよ、といったようになったことの対応の中でだんだんこういったことになってきたというふうに聞いておりますけれども。そういったトラブルが起こったときの対応の仕方は色々あると思うんですね。私も通学合宿をやってる館をいくつか回ってみて思うのは、じっと見ておりますと、小さなトラブルというのは案外子ども達同士の中で解決していく。そのようなことが見られるんですね。それが非常に深刻な大きなトラブルになっていくとこれは大人がどういうふうに解決のために、どういう方向にしていくかということが決定的な要素になってくると思うんですけれども。そこのところで結果的にそういう層は排除することになるんだろうと。そしてこのように親が関って、親が最後までお別れ会の準備もするのが条件じゃないと来られないということの最大の問題点は、そのことによって、子どもが行きたいから行くという意思決定が子どもの側にはないんですね。そういう問題を起こしておるんじゃないかと見ております。とは言いながら、その条件を満たしたものだけでやった通学合宿については、先程もお話したようないろいろな成果が出てきた。だから色んなことで、3つのこだわりで成果ということの2つ目は、ジュニアリーダー、中学生になってからもこの小学校のときに参加した通学合宿に中学生になってからは今度はリーダーとして関わっていくことを計画的に進めている。それで、3人の中学生が、2年目、3年目の通学合宿にはリーダーとして参加するといった、卒業生の参加を計画して行っていると。そういう成果が出てきているということが言えます。時間がありませんが、以上です。

九野坂

ありがとうございました。他にご質問ありますでしょうか。続きまして、意見に入ってまいりたいと思います。ご意見ございませんでしょうか。

山下

たくさんの人が関わって、地域ぐるみで子どもを良くしていくという通学合宿を機に、そのことが結果的に子どもの幸せに繋がっていくし子ども自体が体験の機会を得て、豊かな経験をすることによって成長していくといいますか。このことも間違ってないと思いますし、必要なことであると思います。具体的に言いますと、枝光公民館でやっていること、私のレジュメの一番最後のところで今後の課題の⑥に、地域の教育力を高める事業として、大人を変える、子どもの事業にしていくと言う課題ですね。これが、いわゆる生活体験に参加した子どもたちは、友だちと協力してやっていくことをできるようになったとか、あるいは今までやったことがなかったことを初めて経験したようなことを、たとえば洗濯とか、そういったことを経験して

いくビデオを後で親に見せたら、中には親がほーっとして、一様に驚きの眼で親は見ています。今まで家の子はこんなことが出来るなんて全く思ってなかった。ところが、通学合宿に参加してみると、あんなことをやってると。それが実に驚きでした、とね。私はこれを家庭の中での生活体験にどう繋げていくか、成果を広げていくというか深めていく道ではないかと。枝光公民館が、少数精鋭的なことの中から、深いつながりと深い成果を求めて行く考え方の中に、そこのところを求めていくということも一つはあるんじゃないかと思うんですね。そして通学合宿から帰った後の子ども達を変えていくために何をしていかなければならないかといいますと、やっぱり、親の生活のあり様を変えていくことですね。そこのところを考えていかなければいけないんじゃないか。それも同時にして行こう、というその視点を持って、枝光の３つのこだわりというものが出てくるんじゃないかと思います。ただこれは、枝光方式じゃなかったら出来ないかというと、多くのものでかかわっていこうという通学合宿の中からも、取り組んでいくことは可能じゃないかと私は考えております。

九野坂

ありがとうございました。フロアーの方からご質問ご意見ございませんでしょうか。

男性

今のボランティアとの関りの問題なのですが、私は完全なボランティアか、あるいはチャランポランのボランティアかって言うと、ボランティアというのは、ボランティアと言うのは遊び半分、楽しさがなければボランティアじゃないと思います。したがって、こういった型にはまったのはどうでしょうか。特に子ども達と接するときは、楽しさがなければですね、十字架を背負ったような活動では、ボランティアとしての本当の活動はできないんじゃないかなあと思います。

九野坂

他にご意見ございますでしょうか。はい。

桑原

さっきの台風のことから、これからのことについて１点いいですか。山下さんのところでは、台風が来て実施できなかった館もある、と。台風は、学校なら、今のシステムでは駄目なんですね。先程、正平先生から、負担の与え方のことをコメントしていただきましたけれども、学校では総合的な学習の時間で、できるだけハプニングを起こしながら、出来るだけ子どもに問題を認識させて考えて解決していくと言うようなことをするわけです。台風が来たときに、私としてはやらせたいと思うんです。しかし、それが出来ない現状は、これから学校も行政も地域も含めて、これから、生活体験が不足している現状と言う認識を持つような研修を、簡単ではなくて、やはり何回かの形でやる必要があるだろなと思います。たとえば、学校には「冬休みのくらし」「夏休みのくらし」というのがあります。私は20数年間教員をやっておりますが、ほとんど変わっていません。その中で、子どもは１人では外出できません。当たり前です。当たり前とは思いたくないんですね。で、一人で泊まってはいけませんとか、いう形で出すんですけれども、その前提は事故があってはならない、事故があっては大変だという前提で出してしまうんですけれども。こういったことからも、やはり、事故を何らかの形で取り上げていかないと、台風は丁度いい機会と言うことで私はやらせてみたいなあと思います。ある地区では、避難所体験を学校の中で体験できるような学校もあるわけですけれども。そういう点で、これからの生活体験のあり方について思うところでした。

九野坂

ありがとうございました。獲得しやすい体験・獲得しにくい体験と言うものがあるというお話がありました。直接個人へ向けて、体験活動をすることによって個人が変わる。子どもさんが発達を促進されるような、直接影響するというものがある。家庭に帰っても、家庭がそのことに気付いて動くというお話がありました。ボランティアを固定化、専門化させて、直接家庭へのアプローチをする方法がある。地域社会が変わっていくことによってその地域に住んでいる子ども達が変わっていく方法がある。どういうプログラムを作って

いくのか、という問題もあります。その点について、いかがでしょうか。

小原

テーマが生活体験学習を考えると言うことで、私は先程一つの視点として身体を挙げましたが、身体だけで心のことはどう考えているのかと言うふうに自分で自分に問いをかけてもしょうがないんですが。というのも、先程の負荷をどのように考えていくかと言う正平先生の問い、それから台風のときの方がいい負担になると言うのは、心の負荷というのを実は私は、心も体力と同じようなもので、考えております。体力には体力トレーニングというものがあります。心もトレーニングして、たとえば心の筋力というのはないのかと。筋力と言うのはバーベルを、重さ、重りをかけると出来るわけだから、ストレスと言う重りをかけると、たくましい心が育つのではないかと。それから、心の持久力、走る持久力もありますが、たぶん心の方は忍耐力という心の持久力もあるし、それから、心の瞬発力。瞬発力って言えば、急に走ったりするとかですね。急激にですから、嬉しいとか、楽しいとか、わあっと心に一気に心を出すような場面とかです。それとか心の柔軟性。やわらかさということでイメージ沸くと思うんですけれども。ぽっきっと折れるんじゃなくて、ぐにゃっと、折れられても曲がっていれるぞと。それから、心の平衡性。バランスでしょうか。そういった意味では心もそういう風に考えると、全てそれに見合う負荷があると思うのですね。持久力だと、長く負荷をかけなきゃいけないから持久力なんだろうなと。そういった意味で、プログラムを考えるときに何を育てたいのかと言うのを、そういうのを置き換えて考えると、どういうプログラムがいいのか、全てとは言いませんけれども、今の子ども達、自分の子どもをどうしようかなあと思ったときに、育てたい力というのをはっきり見えてくると評価もしやすいし、変容も見えやすいんですね。漠然と見ていくのは難しいことで、どういう風に変わったかなというのを、やっぱり、生活体験“学習”であると言う以上、変わったかどうかを評価しないといけないわけで、そういう点ではあまり機械論的過ぎますけれども、漠然というよりは評価しやすいのか思います。しかし、ストレスもやりすぎれば怪我をするし、足りなければ負荷にならないと言うことで、そのさじ加減と言うのがそれこそ大変で、ああ、こんな子にはこんなもんなのかなというのがやはりあるんじゃないでしょうか。それから、正平先生がおっしゃられたように、この時期の子にはこういうのが持久力を育てる、この時期の子どもには、柔軟性を育てていくような時期があるのかな、とそういうのから内容と方法を考えて言ったらどうかと思います。

正平

補足しますと、九野坂君は嫌だと言うのですけど、２年前から、２年生の子どもを２泊３日で入れるんですね。上級生は１日目、６泊７日からずっと入って来ておって、最後に、２泊３日ですから、最後の３日間に小学校２年生が入ってくるわけなんです。それで、２年ちょっと過ぎたんですね。私は最近子どもを見てませんから分かりませんが、彼が言うには、やっぱり２年生のときに来た子どもの方が、みんなと適応して仕事も積極的にするし、一生懸命ボランティアさんの話も聞く。３年生のときから来た子どもに比べると２年生の子どもの方がよく色んなものをマスターしている。それと、学年が遅く始まった子どもほどマスターするのが遅い。いわゆる生活の場面で出てくるような技能と言うのはそんなもんだ、と。そうすると、たとえば通学合宿で言えば、４年５年６年という子どもが選ばれやすいんですけど、これはやっぱり大人の指導能力の問題で、学年をずっと下げていくと、いわゆる同級生と違った対応が求められますから、それだけ指導する難度も高くなるわけですね。だからやっぱり、怖がってと言うと語弊があるけれども、どうしても学年を上のほうへ持って行っちゃう。実行するときに大変骨は折れるけれども、子どもに身につけさせたい力とか心とかの観点から言うと、学年を下げていくほうが効果は高いのではないか、と言うようなことが言われるんですね。

九野坂

ご質問ご意見ございますでしょうか。

きた

熊本県○○市から参りました、きたと申します。通

学合宿の前後の子ども達、それから通学合宿に来てからの様子についてお話すると、まず、午前中は昭和30年代の家とかありますので、そこに五右衛門風呂に入りに行き、そこで、学校の方が出前教育に参ります。午後は、給食を食べるために子どもを呼ぶんですね。帰りがけに買い物をしてまた通学合宿に戻ると。学校の授業を、午前中は通学合宿、午後は学校でといったところでやっております。その中で見えてきたことと言いますのは、通学合宿の体験の主体は子どもだということでですね。参加を促す場合に、子ども達の人間関係が見えてきます。回を重ね二年目になったんですが、一年目、始めに心配したのは親なんですね。大丈夫だろうか、子ども達だけでと。しかし、土壇場になって今度は、子ども達の人間関係なんです。そういう中で通学合宿をしたんですけれども。先程、野中先生も言われましたが、うちも小さな学校なもんで、二年目を迎えたときに一番良かったのは、一年目に行った子ども達が通学合宿は「眠かったけれども、きつくはなかった」という 7 日間で、上級生の子どもたちが下級生に励ましを与え、子どもたちの中で通学合宿に行く動きが出たことです。それから、二年目になるときに、保護者の方が子ども達が家に帰ったときに、子ども達の変容が見て分かりますので、保護者の方からも他の保護者に言ってくれる。そういった、子ども達が参加したくなるような土俵作りですかね、そういったものが出来たんではないかと思います。

九野坂

ありがとうございました。今、上手く行ったほうの例をご紹介いただきました。どなたか、上手く行かなかった方の例はございませんでしょうか。横山先生、お手が挙がっていたようですが。

横山

せっかくですから。私がお尋ねしたいのは、意見でもあるんですが、生活体験学習といった場合に、体験の欠損と言う側面と、体験過剰と言うことを考える必要があると思うんです。そして今日、これまでは体験欠損と言うことを最大の前提にして、それをどう補うか、子ども達の発達をどう促進していくかと言うことで来ていると思うんですけれども、しかし、その一方に、今福岡で活発に活動している、メディア研究会の報告がありますが、赤ちゃんのときからすさまじいメディア付けの状態があるわけです。そうしたことをバランスを取りながら行かないと、これはやはり、子どもをいい状態にもって行くということ、体験欠損の視点だけの生活体験学習は出来なくなるんじゃないかと思っているのですが。これは、皆さん方、どういうふうにお考えなのか、まずはシンポジストの皆さんにお尋ねしたいと思います。

それと、もう一つ体験過剰といったことを言いましたが、体験の方法に関係するんですが、大人がプログラムして、いわゆる「させられ体験」、これが非常に多い。子ども達の能動性というものを刺激して、自分から獲得する状況を仕掛けなくては、その成果というものがやっぱり制約されるんじゃないかと思うのですね。そのためには関わる大人達の考え方と言うものが、どうなのか、ここのあたりをやはり工夫しなければいけないんじゃないかと言う考えを持っております。アチコチで通学合宿も行われてますが、賄い付きの通学合宿体験と言う場合も少なくないようでして、より効果を持つためには、そのあたりも考えていかねばと思います。意見とちょっと皆さん方はどうお考えなのか、このことです。

それから、内容に関していろいろ出てましたけれど、私は今回紀要の第 4 号に、上野先生と司会の九野坂さんが書いてらっしゃる論文がありますが、その中に通学合宿を通して見えてきたことについて、 3 点挙げてるんですね。非常に大事な点を。やはりそのあたりが一つの、これから考えていくときにメインになる部分かなあと思います。その一つと言うのは、働く、生活することが教えられてない。そこから色んな課題が出てきます。消費するだけが今の子ども達、消費体験は過剰体験なんですね。それから、いじめなど、してはならないことを厳しく教えられてないと言うこと、他人と共に暮らすことは楽しいこともあればそうじゃないこともあるんですが、そのあたりの体験の欠損。そのあたりは、丸ごとの体験として、どう組み込んでいくのか、ここのあたりがすごく大事なところだということで、先程これ、拝見していてさらに思ったんです。まず、最初の点につきましてどうでしょうか。皆さん方ご意見をお願いします。

九野坂

ありがとうございました。過剰な体験と、過剰でない体験、取り上げられた体験。ご質問・ご意見が出ましたので、野中さんからお願いしたいと思います。

野中

すみません、なんかかみ合っていない部分あるかもしれませんが、すごく通じている思いがありましたので目配せをしてしまいました。体験不足って言いますけれども、全て体験させるわけにはいかないわけですね。学習自体も経験や体験のうちなんですけど、全て体験させることは不可能です。でも、合宿の中身、内容ですね。体験させるのはなんなのか。変な話ですけれど、私が悩んだことの一つですが、例えば、うちの学校は農業体験があるんです。それで、足りない体験は何か、変な事言ってると思われるかもしれませんが、下水道施設のないうちの地域は、たとえば水洗トイレ使うことがないわけですね。だから、自分の地区の立場からなんか体験させておきたいなと思ってることは、そういった部分になるわけですよ。だから、今でもよく分からないのは、たとえば「事典」と言うことになった場合には、合宿の内容といった場合に、どこでも実践するときに、ぜひこれは入れた方がいいんだという部分が絞り込まれるのが大事なんかなと思うのですが。その反面、果たしてそういうことは可能なのかなと。地域の子どもが求めているのは違うので、当然このことも違ってきて然るべきだと。すいません、悩みばっかりで。学校の中でも、プログラムを考えるときにちょっと、「ん？」と思います。先程お話に出ていたのですが、私は、学校の立場で、家庭教育の中にどうにか、こう位置づけられないものかと。まあ、生活体験学習ということで、そういうのはちょっと出来ないんですが。何とか教員の勤務とかも含めて、関わらせたいなと言う思いがあります。

もう一つ、文科省の長期宿泊体験の補助金を何かと言うことも、ちょっとよだれが出ましたけれども、ひも付きになるとまた縛られるなと思って辞めました。学校としてはそういう状況です。体験については、絞り込めるのかなあと言う感じです。すいません。

九野坂

では山下さんお願いします。

山下

横山先生のご意見に全く私も同じ思いなんですけれども。たとえばですね、6泊7日の合宿の中で、日常のメディアの過剰な影響、これに対して、7日間テレビを見せない、テレビゲームしたらいけんよ、と言う。そういうことはそれなりの備え方ではありましょうけれど、根本的な解決にはならないだろうということ。そういう中で、私が常々思っておるのが、資料に書かせていただきましたけれども、やっぱり、北九州の全てがそうだとは言いませんが、合宿の一番問題だと思うのが、大人が用意したプログラムの中で、子どもがお客さんになって、おいでになっとるということです。これを反対に出来ないかなあということをいつも思っています。子ども達が少なくともプログラムの企画の段階でですね、参画が出来る。それを任せてと言うわけにはいかないでしょうけれども、子どもも参画できるということを作り上げていく。その中で、この間はテレビ見まいやねといったことが、子ども同士の中で話し合われて決められる。そういうプログラム作りが出来ないかどうか。

それから、3つのことを言われた、生産することがわからないとか、いじめのことが分からないとか、共同体験がないとか。このこともですね、形の上でいろいろあるんですね。たとえば私、生活体験通学合宿に参加する子ども達をその直前に集めて説明会をやって、さあ、いつからやりますといったやり方じゃなくて、2ヶ月も3ヶ月も前から募集しておいて、その子たちに準備期間を与えておいて、例えば朝味噌汁の具は、大根を植え用意しておこうじゃないかという論議をさせられないかどうか。大根を作ることは都会の中では難しいということだったら、せめてカイワレ大根くらいできないかどうか。こういった議論が出来るような、そういう集団作りを子ども達を主体にして、客体じゃなくてやっていく中で、そのメディアの問題も考えていく。欠損の部分も過剰の部分も、一緒に考えていく。そこから出来ること、小さいことでもいいから一緒にやっていくというものを生み出せないかどうか。そういうふうに考えています。

九野坂

では、小原先生にお願いします。

小原

分かりませんけれども。何にも企てのない空白の時間というのは、非常に重要なプログラムだと思うんですよね、ある意味では。中身のないプログラム。そこで、先程お話したように、子ども達はすごく心の負担になるんですよ。最近の子どもは。何にもないほどつらいものはなくてですね。僕達何しようかあというようなことですね。これを非常に重要なことだと思います。正平さんのお答えになるのかどうか分かりませんが、あるいは横山先生の先程おっしゃられたことに。現代の子ども達のプログラムと言いますか、やることというのは、気分にあったものが必要なのではないのかなというように思います。メディアの問題も、もうこれだけ情報社会の中で育って来た子ども達に、それはそれでもいいのかもしれないけれど、彼らの気分にひどく合わないのかもしれないなということを考えます。それから、欠損と言うのが、質と量の問題でもあるのかなと思います。質の問題で言うとその、古い時代のものを身につけてなくて、それが欠損と言えるのだろうか。あるいは、時代性、文明性といいますか、この世の中、最近の現代の世の中で、ジャガイモを剝くのに包丁でなくとも皮むき器があるし、そんな、色んな文明が変わってきてますので、文明の問題でどのようなものが欠損と捉えれば言いのかなというのもあります。また、欠損と言っても、一つ二つくらい、どの程度の欠損を､問題とするのか｡多すぎる欠損はやっぱりちょっと問題なのかな、と。そういう尺度と言いますか、抽象的なんですけれども、そういったものが必要なのかな、と思います。具体的には、学校でも国際理解とか国際交流とかがありますけれども、大抵は国際交流する場合に、箸や鉛筆や日本の文化、いろいろな動きとか、ものの使い方とか、あまりにも知らないから交流がしにくいのではないかと言う点ではやはり、そういうのが欠損していて、何にも日本人としてのアイデンティティを持たないようなことはやはり問題なのかと思います、私、国家主義ではないんですけれども。まあ、そういう風なことで、考えております。

九野坂

ありがとうございます。

森山

私としては、これからの生活体験学習の内容と言うのを、直接的なつながりじゃないかと思います。私がよく言ってるのは、大豆と言うのが人間とすると、同属的な社会と言うのは「お豆腐社会」だと。そうじゃないかもしれませんが。そして今、人間関係がつながりにくくなってる。だから、一人一人がかかわりながら繋がる「納豆型」社会、納豆ワーキングが必要じゃないかといつも思うんですが。今日の午前中に、新疆ウイグル自治区とかトルコの横山先生たちの報告がありました。ウイグルとか、トルコは、やっぱり西洋的な価値観とは少し違うのかもしれませんが、同属的なつながり、今を楽しむと言うのかな、イタリアも日本と同じようなところがあるんですが今を楽しむというのがある。ところが私たちはどうでしょう。関係が切れてます。つながりが切れてます。それに対して、小原先生が身体性の問題を含めて社会性訓練というのを心の筋力、心の持久力、心の瞬発力、柔軟性とかって言われましたけれども、それは、必要です。

ところが今、カウンセリングやエンカウンターグループというのが、個人がしっかりすればいいんだという形になってきてます。それは私たちがやはり、生活体験とか、協働体験、こういった自然のつながりの中で、人間と人間が繋がるんですね。通学合宿などをしながら共同に切磋琢磨していく中でのプログラムって言うのがあるんじゃないか。もちろん、カウンセリングもエンカウンターグループも大事ですが、個人を助けることにはなっても、つながりの中で助けていくことが出来ない。担っていく社会力と言うのは、単なる社会性だけじゃ駄目。社会のマイナス面を超えていけるような、活性化していけるような力とも思いますし、変えていけるような力、そういったものも含めてですね、議論にならないか。それから、プログラムと言うのは、あんまり自分は信用しない。必要なのは分かるんですけれども。どこにも通用しないけれども、ここには通用するというマニュアルもあるんじゃないか。出していいのではないかと思っております。以上です。

九野坂

どうもありがとうございました。短い時間で濃い話をしていただきました。どうもありがとうございました。黒田さんご発言をおねがいします。

黒田

はい。

九野坂

はい、ご発言どうぞ。

黒田

社会教育センターの黒田といいます。答えになってないかもしれないですが、社会教育を長年やっていて、思うんですけれども、10泊11日であるとか、11泊12日であるとか、社会教育も頑張って宿泊体験なり、生活体験活動をやったりしているのですが。そこで獲得されたもの、あるいはそこでのノウハウが生かせないのかとずっと思ってました。たとえば学校教育の中や、家庭教育の中に出せないのか、と思って非常に残念だという気持ちがあります。どちらかと言うと、そこだけで自己完結に終わってしまうというところがあります。たとえば学校で、先程もありましたけれども、果たして○○体験と言うのが、学校のカリキュラムの中で可能なのかどうか。私はその一つのヒントは通学合宿の中にあるんだろうという風に思うんです。といいますのは、通学合宿というのは、言ってみれば、家庭教育であるとか学校教育が、主に社会教育がやってきた取り組みなんですが、家庭教育や学校教育がかかわれる工夫と言いますか、そういうプログラムを今後組んでいかなければならない。

それから今後、生活体験学習を考えると言ったときに、たとえば、学校教育だけでは出来ない、という視点を常に持っていただきたい。社会教育だけでは出来ない、家庭教育だけではもはや出来ない、という視点を持ちながら、それぞれが関われる工夫とステージがあるということが、今後のプログラムを決定していく上で大事な点じゃないかなと思います。以上です。

九野坂

ありがとうございました。

田川

先程九野坂さんのほうからご指摘があったボーダーラインのお子さん達って言うところで、今、障害を持ったお子さん達がいらっしゃる施設の中で働いているんですが、今、普通学級に所属しているんですけれど、社会性の部分でとても問題を起こしているお子さん達がいらっしゃるわけなんですね。そのお子さん達に、医療機関ですから診断をつけると診断名はつくんですが、でも結局そのお子さん達が所属するのは、普通のご近所にいらっしゃるような形なんですがその子達にやっぱり、何かを身に付けさせてあげたい。社会性というところで、何をやっていくと言うと、先程の横山先生のお言葉じゃないんですが、教えられたこと、教えられないと身につかない、ですかね。そういうやり取りというところも、しっかり身に付けるような、そんな視点を持って生活体験学習のプログラムと言うものを今後作っていただきたいと期待しております。

九野坂

ありがとうございました。はい、どうぞ。

佐藤

北九州から来ました、佐藤といいます。今のことで、私は小倉福祉センターで２年目なんですけれども、色んな子ども達の居場所作りを当初からやってる関係で、色んな子ども達が来る中で、１人、一年目に来た子どもがいたんですけれども。２年目は、キャンプは父子家庭の子どもさんで、ちょっと恵まれてない子どもさんで、とにかく衝突するんですよね、色んな子どもと。それで私もキャンプ中、相当辛抱したんですけれども、やっぱり喧嘩して相手を傷つけたりするんで、もう、みんなと仲良くやっていけないからということで、帰してしまったんですね。それでずーっと自分の中で気になってて、学校にいったときに、その子がいて、いろんな用事で学校とかもちろんつながりがありますので、また遊びにおいでよ、ということでいろんなことがあったけど、またおいで、と言ったら、またずっと来るようになったんですよ。その子はやっぱり、大人から見ても、少しずつ集中力とか出来て来てて、目の輝きがだんだん違ってきたんですけれども、自分の思い通りにならないと、やっぱり逃げ出してしまうんで

すよ。だから、そういう子どもさんは、ある程度、細かい指導が、指導と言ったらよくないんですけれども、配慮、対応が必要で、その子と一緒に遊ぶ中で関係作りというかね、色んな子どもと触れ合うことによって、その子もうまく関係作りが出来てくるというのが、私たちの社会教育施設じゃないかなあと思うんですよ。それがまだまだ途中の段階ですけれど、やはり、学校と社会教育施設が仲良くなることによって、こういった子どもとの関係がお互いに上手く行くんじゃないかなあと思って、これからも頑張っていきたいなあと思います。それにうちは、先程、通学合宿から、中学生、高校生、大学生がアンビシャス運動に関わるようになったという話がありましたが、やはりうちの高校生と言うのは、どこにでもあるような私立の高校生なんですけれども、子ども達と遊ぶボランティアをすることによって、自分達も楽しい、自分達の居場所にもなるけれども、やっぱりなんと言うか、子ども達とはちょっと違う、アドバイスをする自分というものを意識し始めたんですよね。そういった意味では今日も、私は第１分科会に参加して、言葉使いで、子ども達だけで約束作りをしたときに、目上の人には敬語を使おうとか、そういうことが子ども達の中から出てきたことに、すごく驚いたんですけれども、同じように遊んでいるようでありながらも、どこか違う感覚というのが多分育っているのかなあというように思いました。以上です。

九野坂

ありがとうございました。まとめる時間が、あまりないままに、色々ご意見がでたこと、司会の立場としては反省をしております。今日の発言を紀要の中で分かりやすい表現にして、皆さんのお手元に届けさせていただきたいと思っております。最後に、定刻の時間が参っておりますので、コメンテーターの正平さんからまとめをしていただきたいと思っております。

正平

まとめにはならないんですけれども、触れられなかったこと、また、私が大事に思っていることを申し上げて、まとめにかえたいと思います。先程、横山会長からもありましたように、過剰な体験をどう減らしていくのか、これは上野先生が昨年発表された論文の中にも、補完していく体験と、過剰な体験の削減との兼ね合いが今の重要なテーマだと。これはやっぱり、我々が意識していかなければならない重要な点だと思います。ただ、その時に、小原先生もおっしゃったように、獲得しやすい体験と、獲得しにくい、出来にくい体験があるように、削減すべき体験も、なかなか日常的に指導をしなければ、実際に削減の効果が上がらないという部分があると思うんです。そういう意味で言えば、年に１回か、２回、通年で20回やってみたところで来る子どもがまるで違うというような、社会教育の事業で、日常生活の中にあるような、削減すべき体験領域の具体的な効果を挙げると言うわけにはやはり、いかないだろうと思います。そうすると、毎日子どもに出会う、しかも特定の子どもに出会う場面と言ったら、学校しかないわけですから。学校に特別のこと、忙しいから、学校にあれもこれも持ち込むと言うのは酷に過ぎるわけですけれど、しかし、先程もご意見がありましたように度の過ぎた過剰体験と言うものは、１つや２つ的を絞って、具体的に削減するための学習や、取り組みを進める必要があるだろう。特に、PTA 活動のメインにならなきゃいけないのは、そういう取り組みであって、総会に出席したり、学校の求めに応じて、小学校や中学校に出掛けていって色んなことをするのもいいんですけども、しかし、みんなの家庭で、みんなで取り組むしかない。そういったテーマを掲げて、具体的な PTA 活動を進めていく。それこそが、まさに全員参加の PTA 活動ではないのか。総会に来て欲しい、学級懇談会に来て欲しい、役員になってくれ、それを100万回言っても来ん人は来んし、ならん人はならんわけですから。しかし、子どもの生活の中に、いわゆる、がっしりと組み込まれている、これこそ最大の問題と思えるような取り組みを学校は取り上げて、そして PTA に強く働きかけて、そして社会教育もそれをフォローすれば、ある程度の成果は見えてくるのじゃないかと私は思います。

もう１つ、山下さんからご提案のあった二極分化をしている保護者やボランティア、つまり広げていくのか絞っていくのか。それから台風が来た時やるのかやらないのかというお話がありましたけれども、やっぱり、広げていくのも絞っていくのも、それは広げてい

くときに広げる目的、狙うものというものが違ってくる。例えば、今、年間２回行われている通学合宿を、５回にしようと思ったら、今のボランティアで足りるわけがないんです。それは、誤解を恐れずに言えば、広く薄くというふうに、やっぱり大勢集めてやるしかない。しかし、そんなんじゃ駄目だ、この通学合宿は、子どものここら辺をきちっとさせる為にやるんだと言うときにはやはり絞って、庄内町の生活体験学校に登録されてるみたいな、当直ボランティアみたいなところだけで、やりぬくところもある。そういった意味で言えば、福岡県の大平村と言うところで、県立の施設を使って小学校の先生がお一人でやられた通学合宿があるんですね。担任が一人で。それは先生が一人でやられるわけですから、物凄く子どもに負荷がかかるわけですね。しかし、それはそれとしても、特定の目標があるから、それで実行できた。たとえば、伊万里市のように、主催者が４通りも５通りも６通りもあるような、様々、色々違った通学合宿があるという地域もやっぱり作っていかなければいけない。みんな同じものだと言うんじゃいけない。最後の問題については、やめるか、やめないかと言うのは、現場で判断するしかないんですけれど、やめたことによって、あるいは、やめさせられたことによって、次の年の取り組む意欲を喪失するようなそういうやめ方、それはやっぱり、決していい結果にはならないでしょう。以上です。

九野坂

今日は、長時間にわたって貴重なご意見をお聞かせいただきました。また、フロアーの方からも色んなご意見いただきました。どうもありがとうございました。今日ご登壇いただいた方に、拍手でお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。